

D. H. ロレンスとマルクス主義批評 ——レイモンド・ウィリアムズの場合——

吉 村 宏 一

はじめに

D. H. ロレンスに関する第2次大戦前のマルクス主義批評の代表例とも言えるC. コードウェルの批評は、政治の時代と言われた1930年代、マルクス主義とファシズムが激しく対立していた時代の状況の片鱗を垣間見させてくれた。¹ ロレンスの作り出した言説が、コードウェルの場合は、彼の信じるマルクス主義の主張を補強するための素材として利用されたと言っていいだろう。第2次世界大戦も終わり、ファシズムとマルクス主義との抗争はマルクス主義の一方的勝利という形で終息した。ロレンスをめぐる批評においても、彼のファシスト的側面が取り上げられ、これまた激しく批判された。²しかし、実際には、彼をファシストとして批判した人々は、必ずしもマルクス主義者とは限らなかったのである。それは、ファシズムと戦って勝利を収めた自由主義者や民主主義者たちからの批判であった。マルクス主義者たちからの批判もあったかもしれないが、その批判も全体主義的な体制に対する自由主義、民主主義擁護の口調で語られたため、コードウェルのようなマルクス主義の立場からの直截なロレンス批判は聞かれなくなったとも言える。いや、批判というよりもむしろ今度は、ファシズムが消滅したために、労働者階級とマルクス主義、それに対して資本家階級と自由主義という形の対立の構図が明確に表面化してきて、ロレンスに対する評価も、彼が労働者階級出身であった点が強く意識され、部分的ではあるが好意的なものに変わっていくのである。

本論では、イギリスのルカーチと呼ばれていたR. ウィリアムズのロレンスの取り扱い方を中心に第2次世界大戦後変貌していったマルクス主義批評の一端を探ってみたい。もちろん、イギリスにおいて第2次世界大戦後、マルクス主義はコードウェルの信じていたような素朴な形で信じられ主張されることは少なくなった。もともとマルクス主義文学批評は、マルクスやエンゲルスが断片的にいろんなところで書いた文学に関する文書に基づいた議論から始まっているが、基本的にその批評は、「われわれが文学作品あるいは芸術作品とみなしているものは、歴史的な力が生み出した産物であって、産物が作り出された物質的条件に焦点をあてて分析しうる」³とする前提に基づいて行なわれている。言うまでもなく、マルクス主義者たちは、物質的条件は資本や生産手段を持つている階級によって統御されており、ひいては知的、文化的な生産物までをも統御していると、考えている。しかしながら、こういった硬直的な考え方はその後変更が加えられ、文学作品については、物質的条件による統御が全面的に貫徹しているとは思われないようになる。特にG. ルカーチなどは、文学は「比較的自律的で」固有の生産と受容の形を持っており、その自律的な性格の故に、ブルジョワのイデオロギーを扱いながらも、そこに「客観的」なリアリティを映し出すように文学が構築されればブルジョワのイデオロギーは克服できると考えたのである。⁴

R. ウィリアムズも基本的にはマルクス主義批評家としての特質を持ってはいたが、彼のロレンスに対する批評を見るかぎりでは、教条主義的な硬直したところが全くなく、なぜ彼がマルクス主義批評家の大立者なのか疑問に思うくらいである。それは多分にロレンス論を書いた頃の彼がまだそれほど左派的な立場に立っていなかったためかもしれない。いずれにしろ、彼自身も教条主義的なマルクス主義に対して抵抗し、マルクス主義をこれまでとは違った視点から捉えその幅を広げた一人であることは確かであろう。

ウェールズの辺境地の出身で、鉄道員の父を持つウィリアムズは、ロレンスと同じく、都会の知的な世界に入りそこで活躍した。1961年彼と同じ年に、

ケンブリッジに着任したT. イーグルトンが述べているように,⁵ 彼は「上流の中産階級」の支配体制に入り切ることができない人物であった。彼は、‘don’というよりは，‘countryman’のように見えたし，そのような語り方をした。彼は，ロレンスと同様，基本的には，中産階級の人たちの知的・文化的な世界を尊重し，その重要性を十分にわきまえながらも，資本主義，産業主義が支配する世界に対しては反逆せざるをえなかつたのである。イーグルトンは，そういった生き方に向かわざるをえなかつたウィリアムズのことを次のように要約してくれている。

Williams was not only ungrateful enough to bite the hand that fed him; he was truculent enough to do it more and more as he grew older... A striking feature of Williams's career is that he moves steadily further to the political left, in a welcome reversal of the usual clichéd trek from youthful radical to middle-aged reactionary.⁶

普通の人ならば，若き日には左翼的な思想にかぶれ過激な言動をとりはするものの年をとるにつれて幻滅し反動的な思想に赴くものである。ところがウィリアムズはその逆の過程を辿るのである。T. ピンクニーが指摘しているが，⁷ ウィリアムズはケンブリッジに在学中，F. R. リーヴィスの影響を大きく受け，‘radical modernist’や前衛的な学生たちの‘sub-culture’の影響を強く受けたと言われている。ルカーチはモダニストたちの作品を評価しなかつたが，イギリスのルカーチと呼ばれているウィリアムズがジョイスに対して‘un-Lukácsian enthusiasm’を抱いていたのは，ウィリアムズの批評を理解するうえで重要であり，彼をリアリズム至上主義のマルクス主義批評家だと単純に割り切って論ずることは危険である。

では，ウィリアムズはD. H. ロレンスという作家をどのように捉え，どのように位置づけているのだろうか。彼は，ロレンス論として一冊のまと

まったく書物を書いてはいないが、*Culture and Society, The English Novel from Dickens to Lawrence* それに *The Country and the City*において、それぞれ1章ずつを設けて論じている。またその他にも、例えば、*Modern Tragedy*⁸ や *Problems in Materialism and Culture*⁹ などにおいても、部分的ではあるが、論じているし、いろんな論集に寄稿しその中で取り上げていることもある。本論では、主として、章を設けて論じている3冊の著作を執筆年代順に取り上げて、ウィリアムズがロレンスのどのような面に注目したのか、なぜその面が注目されねばならなかったのかといった点を中心に、ロレンスという作家を鏡として、ウィリアムズという批評家がどのように映し出されるのか見てみたい。

1 *Culture and Society* におけるロレンス論

Culture and Society 1780-1950 は1780年からウィリアムズが執筆に取りかかった年、1950年までの、近・現代のイギリスの文化史を描き出した壮大な書である。S.ホールは、この書は「これまで長きにわたって『文化』は反動的な役割を担う立場に位置づけられてきたが、それを矯正しようとする試み」¹⁰ であると述べ、反動的な支配階層への抵抗の書であることを認めている。しかしこの書の表題は「文化と社会」という幅広いテーマを示しているにもかかわらず、主として文学作品が取り扱われている点にホールは不満の意を表明している。政治や経済、あるいはリベラリズムや経験主義といった思想上の問題、またフランス革命、マルクス的観点、それにイギリス以外の国際的な幅広い視点からの論究に欠けているところが残念であると述べている。¹¹

こういった批判はある面ではなるほどと思わせられるが、ホールの要求はあまりにも大きすぎるようにも思われる。むしろウィリアムズに対する期待が非常に高いため、逆にこういった批判が出てきたのではないかとも考えられるのである。確かに、後年のウィリアムズの多面的で精力的な仕事ぶりか

ら判断すると、もしかすると可能であったかもしれない。だが同時に、1950年頃のウェリアムズは、「イギリス文学」こそ「法学、科学、政治学、哲学、歴史学などとはくらべものにならぬくらいに重要な学問であり、あらゆる学問のいわば頂点に立つもの」¹²だと主張するF. R. リーヴィス一派をかなり意識していたとも言える。事実、*Culture and Society*でのロレンス論においても、二度、リーヴィスの名前を出している。ウェリアムズは「カーライルとロレンスとは関連が深い」ことを主張しているが、その主張にわざわざ注を付けている。¹³ その注において、リーヴィスが*D.H.Lawrence: Novelist*でカーライルとロレンスとの関連については今後も「繰り返し」取り上げられるだろうと、やや非難するような口調で書いているが、¹⁴ ウェリアムズは、自分には非難されるいわれはないと考えるので、主張を取り下げるつもりはないと言い切っている。

ウェリアムズがカーライルとロレンスとの相似性を強く主張するのは、*Culture and Society*では、ロレンスがイギリス社会をどのように捉えていたかを主として論じようとしているからである。特に、カーライルなど19世紀からの産業主義批判の伝統が、80年の歳月を経て、ロレンスによって力強く甦ったと主張している。ロレンスが「19世紀からの伝統」として受け継いだものとは産業主義批判であるが、とりわけその批判は、「人間のすべてのエネルギーがただただ卑しい利己的な所有・獲得の競争に駆り立てられたこと」に向けられてきた。そしてその競争の結果、目的となったのは「全くの機械的唯物主義」であり、個人も社会も「機械的になり、有機性を失い、無定形の」状態に陥ってしまうことに対して警鐘を鳴らしてきたのである。ロレンスがこういった産業主義に対する批判を引き継いだことは確かであると、ウェリアムズは強調している。ところが、こういった伝統が引き継がれたのは、ロレンスが先人たちのことを探査・学習したことによってではなく、ロレンス自身の幼少からの体験によって行なわれたと、ウェリアムズは説明している。つまり、ロレンスは歴史的に過去を振り返ることなどしなかった

男であり、彼自身の体験から産業主義の罠を鋭く見抜いていたのである。

ウイリアムズ自身、ウェールズの労働者階級の出身であるため、ロレンスに共感を抱いたのだろうか、ロレンスが炭坑夫の息子であったことについて次のように記している。

That he was the son of a miner adds, commonly, a certain pathetic or sentimental interest; we relate the adult life back to it, in a personal way.¹⁵

この一文には、ウイリアムズのロレンスに対する共感めいたものが漂っていると思われてならないのであるが、彼は、個人的な形での共感だけではロレンスが労働者階級に生まれた意味を十分に理解できないと述べ、さらに次のように付け加えている。

It is, rather, that his first social responses were those, not of a man observing the processes of industrialism, but of one caught in them, at an exposed point, and destined, in the normal course, to be enlisted in their regiments.¹⁶

このように付言することによって、ロレンスはカーライルの後継者ではあるが、彼が幼少の頃より産業主義の脅威に曝され、その罠にはまり込む恐怖を身をもって体験していた点¹⁷がカーライルとの根本的な違いであることを、ウイリアムズは明らかにしている。ロレンスは晩年“Nottingham and the Mining Country”というエッセイにおいて、炭坑夫たちが「すべて打ちのめされている」と書いているが、それは、ロレンスが産業主義との闘いによってすべての男たちが「打ちのめされた」ことを実際に体験的に受けとめていたが故の表現であると、ウイリアムズは解釈している。しかしながら、そのことは、ロレンス自身は産業主義の罠をなんとか抜け出し、一種の高みに立つて、自分の仲間たちを見おろしている観察者と化してしまったことを意味す

るのである。畠に落ち込んだ連中には産業主義の悪弊は全く見えず、彼らはその体制に順応しそれなりに満足して生きていく。ロレンスは、自分の体験から、産業主義は個人的な問題ではなく社会共通の問題であることをよく認識していた。そして彼が産業主義の体制からいかに抜け出るかについて必死に考えたことも確かである。だが、彼がその体制を真面目に変革しようと考え方なかつたことについては、これまでかなり非難の的となってきたことも確かである。だがその点について、ウェイリアムズは、そういういた非難は的外れであるとして変革こそ正当な道筋だとみなす人々の意見を退けている。

事実、ロレンスは産業主義体制の支配からかろうじて脱出し、特に晩年、ある種の高みに立ってやや説教者めいた口調で、意見を述べている。彼は、産業主義の体制に順応して生きている人々もできれば脱出してほしいと願いながらも、脱出は簡単なものでないことをよく知っていた。その脱出は、単に産業主義体制に囚われた形での仕事をしないとか、教育を受けて中産階級へ移行すれば済むとかいった類いの問題でないことを知っていたのである。それは J. M. バリーや H. G. ウェルズたちが行なった形であって、¹⁸ ロレンスにはそういったやり方ではなんら脱出にはならなかった。彼は明らかに産業主義を支えているものが「卑しい利己的な所有・獲得の競争」の欲望であることを身に染みて分かっていた。つまり、単に教育を身につけたり、上層の社会階級に移行したりしても、その欲望に駆り立てられているかぎりは、結局同じ土俵の中をあちこち動き回っているにすぎないのである。ウェイリアムズは、ロレンスにとって、人間の貴重なエネルギーが単なる「所有・獲得の競争」にのみ向けられている状況が我慢ならなかつたと、解釈している。そして「所有・獲得の競争」の欲望に駆り立てられない別の方向をロレンスは模索したと、述べている。

労働者階級出身のロレンスの産業主義体制への対応のあり方は、確かに一筋縄ではいかない複雑なものである。実際、現実にロレンスがとった行動や発言は、労働者たちとの連帯に向けて活動しようとするのではないし、過激

な発言をしながら、結局のところ強大な産業主義体制に背を向けて世界を彷徨い歩いただけではないかと、彼に対して非難が浴びせかけられてきた。こういった非難に対して、ウィリアムズはからずしも同調しているわけではない。イギリスの社会を出て世界を彷徨い歩いたロレンスは個人のことのみを考え、個人に対する「社会の要求を拒絶する」‘romantic figure’であるとは捉えていない。むしろロレンスは‘community’のことを重視していたと、主張するのである。ウィリアムズの考えでは、ロレンスは、人間の本能としては、‘the instinct of community’のほうが‘the sexual instinct’よりも強いと考えており、彼は「社会の要求」を拒絶したのではなく「産業社会の要求」を拒絶したとみなすのである。ロレンスは、本来‘community’が個人にとって非常に重要な役割を果たしてくれるものであると信じていた。ところがイギリスの産業社会は‘the instinct of community’を抑圧したがゆえに、彼はイギリスの社会を徹底して批判し、そこから飛び出していったのである。彼が世界を彷徨い歩いたことに関して、ウィリアムズは‘vagrant’と‘exile’の意味の違いを次のように説明し、ロレンスを擁護している。

He was not a vagrant, to live by dodging; but an exile, committed to a different social principle. The vagrant wants the system to stay as it is, so long as he can go on dodging it while still being maintained by it. The exile, on the contrary, wants to see the system changed, so that he can come home. This latter is, in the end, Lawrence's position.¹⁹

ウィリアムズにとっては、‘community’をどのように捉えるのか、それは、後に‘knowable community’という形で、彼自身の文化論の基礎を形づくる重要な問題であった。彼の文化論は、彼の幼年期の体験や出身地の社会的背景が大きくかかわっていると思われる。その点について、例えば、S・ホールは次のように書いている。

His father was a railway signalman, but he lived in a village where more than half the population were small farmers. He comments here on the unusual way in which the rural pattern of small farmers interlocked with the unionized and waged world of the railway. The strong and rooted sense of community—a concept which has taken on a peculiarly resonant meaning in all of Williams's writing—and his double attachment to countryside and the world of the railway workers are strands in his early formation which have been continuously reworked as themes in his later work.²⁰

ウェリアムズが生まれ育った世界は、現代文明の重要な構成要素であり労働運動の拠点である鉄道の世界と小農民たちの古い世界である。本来ならばその二つの世界は相容れずに対立するはずなのだが、ウェールズの辺境の地では二つの世界は融和し、一つの‘community’を作り出していたのである。もちろん、実際にそういった‘community’が現実にあったのか、それともウェリアムズのヴィジョンとして存在していたのかは定かではないが、その‘community’のヴィジョンはウェリアムズにとっては貴重なものであり、彼がロレンスの‘community’の捉え方や描き方に興味を持つのは当然のことであろう。

*Sons and Lovers*において、ロレンスが現代産業社会の原動力を掘り出す炭坑夫の世界とハッゲズ農場で代表される農夫たちの世界を実に対照的に描き出したのは、よく知られているところである。ウェリアムズは、*Sons and Lovers*の特に前半部分を絶賛している。というのは、産業主義の抑圧を厳しく受けながらも、互いに固まって密着して生き生きと暮らす家族像が実際に見事に描き出されているからである。*Culture and Society*の段階では、ウェリアムズはまだ‘community’の問題を持ち出していないが、*The English Novel from Dickens to Lawrence*では、ロレンスの初期の作品にはウェリアムズが思い描

く‘community’像の一つの典型が描き出されているとして、再度取り上げられ論じられている。

次に、ウイリアムズはロレンスが社会主義をどのように捉えていたかについて論を移し、次のように要約している。

To Lawrence, the weakness of modern social movements was that they all seemed to depend on the assumption of a ‘fixed activity’ for man, the ‘life activity’ forced into fixed ideals.²¹

生の流れをあるがままに受け入れずすべてを観念化してしまい、観念と化した理想に生の流れを無理矢理にはめ込もうとするのが、現代社会の大きな特徴であるが、社会主義の場合も同じであると、ロレンスは主張している。その主張は正しいとウイリアムズは認めており、そういった考えは、W.モリスの社会主義と非常によく似ているとコメントを付けている。しかしながら、ロレンスには基本的にモリスのような社会主義者に共通するところが多くあるにもかかわらず、晩年のカーライルのように‘superior beings’の存在を認め、彼らに「跪押し」従うことを是とするような考えに向かっていった点に不満を示している。²²「民主主義」というエッセイにおいて、ロレンス自身、「他の人の存在の在り方を決定するようなことは何人も行なうべきではない」と述べていたのに、‘superior beings’の存在を認め、強者に弱者は従うべきだというようなことを主張するのは、まさしく自家撞着であり、ロレンス自ら自分が道を踏み外したことを見ると、ウイリアムズは批判的な口調で述べている。とはいえ、ウイリアムズは、ロレンスのファシズム的な傾向についてはそれほど強く糾弾していない。むしろ‘exile’の状況下にあったが故にそういった方向に向かったロレンスの「悲劇」として捉えている。

‘exile’として国外に脱出した者の産業主義への対応の特質なのだろうか、ロレンスは「意識」の問題と現実の物質的問題とを別個のものとして切り離

して捉えていたと、ウェイリアムズは考えている。つまり、産業主義に対しても、生活の糧を得る「仕事」とそういった仕事の世界を切り離して生きる「生活」とをそれぞれ別個のものとして設定し、それぞれに対して適宜対処していく、いわゆる‘suburban’的な対応の仕方と同じ形のものがロレンスに見られると、ウェイリアムズは主張している。ロレンスは徹底して‘the venture into consciousness’を試みた。しかしそれは、現実の‘material needs’とはかかわりのない別個の試みなのであった。確かにロレンスは、*Studies in Classic American Literature*において、‘the living, organic, believing community’に属しているとき人は自由であると主張していたが、それだけでは不十分であるとウェイリアムズは考え、次のように苦言を呈するのである。

The ‘living, organic, believing community’ will not be created by standing aside, although the effort towards it in consciousness is at least as important as the material effort.²³

このようにウェイリアムズは、ロレンスが現実の世界から身を引いた形で新しい‘community’のことをいくら説こうとも、それは何ら説得力を持たず、実現の可能性などありえないと確信し、ロレンスの‘community’論を退けるのである。

他方、ウェールズの鉄道員の息子であるウェイリアムズ自身は、産業主義を推し進めるイギリスの知的世界の本拠地とも言えるケンブリッジに身を置き、M. アーノルドの流れをくむ「これまで語られ、達成された最高のものである」‘culture’の洗礼を受けた。彼は、ロレンスほどに過激にイギリスの知的伝統の価値を否定することはなかったが、彼も、ロレンスと同様、生きている文化とは「未知なるもの」を多く含み、多様な分野や階層から生み出されてくるものだと、考えた。彼は、自分の願い求める‘culture’について、さらに‘community’について、次のように生き生きと語っている。

A culture, while it is being lived, is always in part unknown, in part unrealized. The making of a community is always an exploration, for consciousness cannot precede creation, and there is no formula for unknown experience. A good community, a living culture, will, because of this, not only make room for but actively encourage all and any who can contribute to the advance in consciousness which is the common need. Wherever we have started from, we need to listen to others who started from a different position. . .²⁴

ウィリアムズにとって、「culture」とは特定の階級が生み出した特殊な‘culture’ではなく、どの階級の人々にも共通する‘common culture’でなくてはならなかった。しかしながら、ウィリアムズはロレンスの主張する‘living community’を現実から身を置いて考えて「意識」上の理想であると批判していたが、ウィリアムズ自身の希求する‘good community’や‘living culture’はどういう具現化されていったのだろうか。筆者にはロレンスもウィリアムズもともに「意識」上の理想を違った表現で提示しているのではないかと思われてならない。

2 *The English Novel from Dickens to Lawrence* におけるロレンス論

Culture and Society の出版から 12 年後の 1970 年に、*The English Novel from Dickens to Lawrence* が出版された。ウィリアムズは、「序文」において、ディケンズからロレンスまでのほぼ 100 年にわたる間の小説を見ると、‘community’とは何であったのか、人々はそれとどのようにかかわってきたのかといった問題が、中心課題であると思うと述べている。とはいえ、ウィリアムズは必ずしも‘community’の問題を、例えば社会学的な観点から論じようとしているのではない。彼は小説研究の観点からその問題を捉えようとし

ている。この書におけるキー・ワードの一つとも言える‘knowable community’について次のように書いている。

Most novels are in some sense knowable communities. It is part of a traditional method—an underlying stance and approach—that the novelist offers to show people and their relationships in essentially knowable and communicable ways. Much of the confidence of this method depends on a particular kind of social confidence and experience.²⁵

小説内に構築された世界では、共通に「知りうる」関係や「知られている」関係が明確に分かるだけでなく、そういう関係を支えている社会構造そのものもきちんと確立されている。またそこに登場する人物たちについても、共通に「知りうる」関係によって彼らのすべてを「知りうる」と、ウェイリアムズは考えている。彼は、典型的な作家としてJ. オースティンを取り上げ、彼女の作り上げた‘knowable community’について説明してくれる。オースティンは、ある特定の社会階層の枠内の実にこじんまりした小社会を描いていて、そこに登場する人物たちを、作者のオースティンは片時も目を離さず観察し記録している。人物たちを支えているモラルはオースティン自身のモラルである。このように小説内に作り上げられた‘knowable community’はそれ固有の実体を持ち存在するのであるが、だが同時にそれが作者のモラルや想像力によって作り出された‘selective’な‘community’であることも確かなのである。

ウェイリアムズは、オースティンの作品に見られる‘knowable community’が18世紀から20世紀にかけてどのように描き出されていったのかを検討しながら、イギリス小説の流れを辿っている。他方、F·R·リーヴィスたちは、17世紀の小説に有機体的統一のある共同体、いわゆる, ‘organic community’を見いだし、それこそ本来のイギリスの「偉大なる伝統」であ

るとして一つの価値基準を作り出した。そしてその基準に基づいて18世紀以降の作家たちを評価していった。もちろん、そういう作業を支えている基本には、‘English’およびそれが作り上げてきた「英文学」こそ‘culture’の中核であるという考え方があり、ヨーロッパの強大な‘culture’の影響からイギリス固有の‘culture’を防御しようとする、ある種の国粹主義的なイデオロギーが当然組み込まれていたと言えるだろう。²⁶

ウィリアムズはイギリスのルカーチと呼ばれていたが、彼も、リーヴィスと同じく、ヨーロッパの‘culture’の影響に対してイギリス本来の‘culture’を尊重しようとする傾向があった。そのため、彼の考える‘knowable community’も明らかにイギリスの風土の中で‘English’によって作り上げられた世界なのである。こういった点は、彼のロレンス論を理解する上で重要なことのように思われる。ロレンスがイギリス人であったこと、それもイギリスの炭坑地帯の労働者階級の出身であったこと、その点が重要であったのである。*Culture and Society*においては、ウィリアムズはロレンスの評論やエッセイなどを数多く引用し小説からの引用はほとんどなかったが、*The English Novel from Dickens to Lawrence*においては、小説、それもイギリスを舞台に設定した作品のみを取り上げて論じている。小説からの引用が実に多いということから見ても、この作品が、*Culture and Society*と違って、文学研究を主眼とした書であることは確かである。しかし、彼の論はロレンスの小説全般にわたる研究ではない。ロレンスが‘exile’として放浪した時の作品には全く触れず、イギリス社会を舞台にしたものだけを取り上げているが、その理由としては、小説研究の形を取りながらも‘knowable community’という基準によってロレンスを解釈したため、イギリス社会以外の世界を多く描いている放浪時代の作品は除外したのではないかと考えられる。いずれにしろ、こういったウィリアムズの作品の選別には、ロレンスをあくまでイギリス人作家としてイギリスの‘culture’の範疇内に位置づけようとする意図が明らかに見られるのである。

まず最初に、ウェイリアムズは、ロレンスの作品が一般に‘backwards’に読まれる傾向があることを指摘している。²⁷ このような読み方がされるのは、当然ながら、‘early’の段階から徐々に作家は成熟し、後期の‘achievement’と言われる作品を作り出したという前提があるからである。その場合、後期の作品は初期のものより優れたものであり、初期の段階ではいろいろな夾雜物が入り込んでいたが、その後取捨選択され、不要なものが淨化された上で後期の傑作が出来上がっているということになる。この問題提起は、*The Rainbow* と *Women in Love* とその前に書かれた *Sons and Lovers* との評価をめぐって行なわれていると、考えられる。例えば、F·R·リーヴィスは、*The Rainbow* と *Women in Love* をロレンスの最高傑作として高く評価したが、*Sons and Lovers* については、そこで見られる特質はロレンスが‘great novelist’になることを示唆するものではないとして、*Sons and Lovers* を退けている。²⁸ ところがウェイリアムズは、このリーヴィスの見解を知った上のことであろうが、*Sons and Lovers* を‘achievement’として高く評価するだけでなく、*The Rainbow* や *Women in Love* に関しては、傑作と認めながらも、‘knowable community’の観点から、*Sons and Lovers* ほどには評価していない。

ウェイリアムズは、ハーディとロレンスがともに「独学者」であり、共通の感情や思想を持ち、同じような階層や田園地帯を背景にして、中産階級出身の作家たちとは異なる独自の言語表現を生み出したと、述べている。ウェイリアムズが言語表現のことを取り上げているのは、この独自の言語表現によって、ハーディやロレンスは実体が感じ取れる生きている‘community’をそれぞれ固有の形で描き出していると考えているからである。

...when I read Lawrence's early work—especially the stories up to *Odour of Chrysanthemums*, the first three plays, and then *Sons and Lovers*—what I really find is a sort of miracle of language. In those early years before the other difficulties started—difficulties he had to go on to—what he achieved

is marvellous, by any standard at all. The language and the feeling—new language, new feelings—come alive together. What really comes alive is community, and when I say community I mean something which is of course personal: a man feeling with others, speaking in and with them.²⁹

ロレンスは、自分の小説に登場する人物たちにぴったり合致する‘colloquial’で‘informal’な言葉を使って、彼にしか作り出しえない生き生きとした小説世界を作り出した。その状況をウィリアムズは次のように説明している。

He is writing like that because he is feeling with his people, not of them or about them, but within a particular flow...³⁰

ウィリアムズは、ロレンスが描き出したものは単なる客観的描写ではなく人々との共感から生じる特殊な「流れ」であると、言っている。そしてこの「流れ」こそ‘essential community’であると説明している。母と子、母とミリアム、父と息子、ボトムズとハッゲズ農場といったものが作者の「体験」が滲み込んだ形で一体化され、一貫した「流れ」にうちに描き出されている。そのため、ウィリアムズは、*Sons and Lovers*を*The Rainbow*や*Women in Love*に進むための予備的な作品ではなく‘achievement’そのものであると、主張するのである。³¹

それでは*The Rainbow*や*Women in Love*では何が不足しているのだろうか。それは、言うまでもなく、人々との共感から生じる「流れ」であり、その「流れ」を塞き止めるのは、ウィリアムズがロレンスの直面した‘difficulties’と呼んでいるものである。その‘difficulties’のために、‘community’としての小説が破壊されていくと、ウィリアムズは考えている。彼は、その‘difficulties’の先触れをクララという人物に見ている。彼女は、ポールやミリアムとは異なる基準で創造された人物である。クララは、他の人物が成長していくた

めに必要な人物としての「機能」を負わされていて、他の人物たちの作り上げる‘community’に入りえないと、ウェリアムズは指摘している。ウェリアムズが考える‘community’を作り上げる人物とは、ある種の観念やテーマに添って作者が作り上げる人物ではなく、小説世界に‘given’された形で現われ、その世界に確固として存在している。この‘given’の感覚こそ‘community’を考える上でのキー・ポイントなのである。³²

F·R·リーヴィスが*Sons and Lovers*についてあまり論じず、*The Rainbow*を詳しく論じたのに対して、ウェリアムズは*The Rainbow*についてはそれほど論じていない。それは、彼が主張する‘knowable community’が*The Rainbow*ではあまり描かれていないからである。*The Rainbow*は、*Sons and Lovers*と違って、ロレンスが明白な意図をもって書いた小説であることをウェリアムズは強調している。確かに最初のほうは、‘community’の経験が描かれているが、後半は‘community’の破壊が描かれており、特にアーシュラによる個の確立を求めての行動が作者の意図に添って一貫して描かれている。そういう個の確立を求めての動きは‘community’からの分離を求める動きとなる。‘Separation—individuality. Community—togetherness.’とウェリアムズは簡潔に記しているが、³³ この図式的な説明によると、*Sons and Lovers*では‘togetherness’が描かれたのに対して、*The Rainbow*では‘individuality’を現代の産業主義社会においてどのように確立するかがロレンスの最大の関心事となっていたため、‘community’を描き出すことができなかったということになる。この人物たちの‘individuality’を求めての動きこそウェリアムズの言うロレンスが直面していた‘difficulties’なのである。

*The Rainbow*において‘individuality’の確立を求めての探求が始まり、*Women in Love*においてその探求はさらに深められ、そこでは、‘community’の可能性など全く問題にならないだけでなく、人間の存在の意義すら疑問視されてくる。

What he is writing more powerfully than any English novelist of the century is the experience of loss: a loss of what, in writing, he had himself found—the experience of community, of the irreducible reality of himself and other human beings. *Women in Love* is a masterpiece of loss, and it enacts this loss in itself. He hesitated, significantly, about how it should end; how it could end. . . .³⁴

ウィリアムズは、*Women in Love*という小説が彼の希求する‘community’を描く小説ではなく全くの正反対の作品である点を強調することで、この小説の特質を見事に示している。ロレンスは、現代産業社会での‘individuality’の確立の可能性を徹底して追求していき、その結果、依拠すべき信念も世界も仲間も何もかもが消滅していく喪失感を赤裸々に描き切った。つまり、ロレンスは現代における人間や社会の存在する意味や意義を徹底的に追求したが、何一つ見いだすことができず、以前にあったはずの‘community’や人間の存在感すらも消え去っていることに気がつくのである。ウィリアムズは、何もかも失ってしまった後ロレンスはこの小説にどのような結末を与えるかと戸惑っていると、指摘している。

*Women in Love*において、恐ろしいまでに孤立してしまっている現代人を描き出したロレンスであるが、どのようにして孤立を解消し己れの‘reality’の回復をはかりうるのかという問題を解決するために、ロレンスは躊躇しながらも‘生命の炎’を求めての困難な試みを行なうと、ウィリアムズは述べている。しかしウィリアムズは*Women in Love*以降の作品、*Aaron's Rod*, *The Lost Girl*, *Kangaroo*, *The Plumed Serpent*については全然触れていない。ウィリアムズが全く触れていないのは、それらの、いわゆる‘leadership novels’と呼ばれる作品には、ファシスト的傾向が見られるためなのだろうか、あるいは小説として論じる価値がないと判断したためであろうか、その点については何ら言及がない。筆者には、それらの作品には、イギリスの問題があまり

書かれていないがゆえにウェイリアムズは特に取り上げなかつたのではないかと思われてならない。

ウェイリアムズは、最後に、*Lady Chatterley's Lover*に言及している。この小説には、*Sons and Lovers* や *The Rainbow* ほどの規模と内容がないと批判的であるが、他方これまで消えてしまつたエネルギーの「流れ」がふたたび流れはじめたと、ウェイリアムズは好意的な解釈もしている。そしてロレンスが最後まで小説家として何かを取ろうとして手を伸ばしている様子がうかがわれ、われわれ読者を勇気づけるものであるとまで述べている。小説家としての彼が行なつた試みは未完成のままで終わつたが、その試みの過程が明確に示しているように、ロレンスが直面した問題は非常に厄介であり、簡単に解決のつかない類いのものである。その問題はロレンスとともに終わつたのではなく、産業社会の支配のもとに生きるわれわれに引き継がれるべき問題であると、ウェイリアムズは強調している。³⁵

ウェイリアムズがこだわりつづけてきた‘knowable community’との関連で見れば、彼にとって20世紀のイギリス作家のうちでロレンスは実に重要な作家であったように思われる。なぜなら、ロレンスはその‘community’を若き日に描き出すことに成功しただけでなく、同時に、「個」を重視する20世紀のイギリスの文化的風土においては、そういう‘community’など成立しない状況にあることを今度は徹底して描き出したからである。さらにウェイリアムズの*Lady Chatterley's Lover*の解釈を見れば、彼とロレンスとが同じ階層の出身という思い入れもあるのだろうが、ウェイリアムズは、ロレンスが提示したすさまじい「喪失」の状況を認めながらも、それでもなお‘knowable community’が生まれるのではないかという期待感を持ち続けようとしている。そのため彼は、*Lady Chatterley's Lover*でのロレンスの廃墟から甦る試みは確かに弱々しいと認めながらも、その試みを後年の作家たちに引き継いでほしいと願うのである。

3 *The Country and the City*におけるロレンス論

これまで *Culture and Society* と *The English Novel from Dickens to Lawrence* におけるウィリアムズのロレンスの解釈を見てきた。ウィリアムズは、‘culture’とか‘community’とかいった大きな問題に迫るためにロレンスのエッセイや小説を素材として取り上げ、それぞれテーマとの関連でユニークな解釈を提示し、一つのロレンス像を描き出してきた。左翼的な思想傾向が強いと言われているウィリアムズの解釈ならば、当然、コードウェルのような共産主義者と同じく、批判的なところが多いだろうと一般的には思われるかもしれない。しかし、これまで見たかぎりでは、ウィリアムズの解釈には教条主義的なところはなく、彼自身ロレンスと共に通するところが多分にあるせいか、非常に共感的であるように思われる。しかし、ロレンスの放浪時代のいわゆる‘leadership novels’については全くと言っていいほど言及せず、*Sons and Lovers*, *The Rainbow*, *Women in Love* そして *Lady Chatterley's Lover* の4作のみを集中して論じているのは、自分の論に都合のいいところのみを取り上げ、全体としてのロレンスを取り上げていないのではないかと、批判の対象となるかもしれない。だが、筆者には、こういった取り上げ方をしたのは、彼が執筆していた当時リーヴィスの影響が非常に強く、リーヴィスが評価しなかった上記4作以外の小説を論じるにはそれなりの強力な根拠を提示する必要があったしウィリアムズ自身‘leadership novels’を擁護するだけの根拠を見いだすことができなかったのではないかと、思われる所以である。当然ファシストとしてのロレンスの問題もかかわってくるだろうが、この問題については、ウィリアムズはロレンスが直面した‘difficulties’は非常に複雑で厄介なものであり、それほど単純に割り切れないと考えていたと思われる。しかしながら、他方、ロレンス自身、複雑で厄介な‘difficulties’に直面しながらも、それを打破しようとさかんにイギリス社会の‘regeneration’について語っているのである。ウィリアムズは、このロレンスの主張を彼の私的な‘vision’であつ

て現実の人間社会の次元を越えたものであるとみなしてはいるが、それでいてロレンスの主張を単なるファンタジーとして退けてもいないのである。ロレンスに対しても決め付けるような態度をウェリアムズが持っていないところは興味深い。ここにはウェリアムズのロレンスに対する共感が読み取れるように思われてならない。

次に、社会の変革をめぐってのロレンスの主張をウェリアムズはどのように解釈したのか、1973年に出版された*The Country and the City*におけるロレンス論を取り上げて、簡単に述べておきたい。この書では、ウェリアムズはスコットランドの社会主義的色彩の強い作家、グラシック・ギボンと比較しながら、社会改革運動に対するロレンスの態度について触れている。先にも述べたが、ウェリアムズ自身‘border’に生まれ育ち、田舎と都市が胎む問題について強く意識していた。³⁶ その意識を具体的な形で表わした書として本書は彼の代表作の一つに数えられるのではないかと思われる。‘border’とのかかわりで、ロレンスについて、彼は単に農場と炭坑との間の‘border’だけでなく、労働者階級と中産階級との間の‘border’、そこから付隨的に生じてくる教育や芸術などの分野での‘cultural border’で育ち、彼自身はその‘border’を越えていった人物であると、ウェリアムズは述べている。‘border’を越えたという意味では、彼はハーディやG. エリオットの後継者であるとも、ウェリアムズは指摘している。しかし、ロレンスが描き出した世界は先達たちのものとはかなり異なっていると述べ、ウェリアムズは*The Rainbow*の感動的な冒頭の場面を取り上げ、そこで描かれた農耕社会は歴史上のメタファーと化している点を指摘する。³⁷ 男たちは「生の流れ」にどっぷり浸かったまま眠りのごとき生活を続けている。他方、女たちは子どもたちに教育を受けさせ閉鎖的な村社会から脱出させようと試みる。だが、女たちのこの願いを実現しようとすると、子どもたちは汚くて空疎な‘wasteland’を通り、「産業化されたシステム」に組み込まれ、結局は精神も肉体も機械的な習慣に慣らされ活力を失ってしまうことになる。

The Rainbow の冒頭に見られる「生命の流れ」に対する男と女との2つの対応のありかたは、ロレンスが近代の歴史を捉え描き出す場合の基本的な視座であったと、ウイリアムズは説明している。産業主義やそれが具体的に表われる財産や所有の問題(ゴールズワージやベネットなどほとんどの作家たちはこの問題に囚われ、それを描くことに集中していた。)に対して、ロレンスはそれを「死の印」として徹底的に否定した。確かに、ロレンスが産業主義を否定するのはよく理解できる。だが問題となるのは産業主義に対峙するものとして何を持ってくるかである。ウイリアムズにとっては‘farming community’が産業主義の対極に位置すべきものと考えたいところであろうが、ロレンスが提示した対極はある種の‘primitivism’とも言える, ‘natural processes’と直接かかわりを持って生きることであった。³⁸ つまり、動物や木々、人間の生きた肉体が産業主義に立ち向かう対抗軸となったのである。ウイリアムズは、なぜこういった特異な対抗軸をロレンスが提示したのかについて, ‘revolution’と‘regeneration’の意味の違いを説明しながら整理している。

What Lawrence again and again rejects, though the fact that he is continually drawn to consider it is equally significant, is the idea and the practice of social agencies of change. Where Lawrence hesitates, always, is between an idea of regeneration and an idea of revolution. He stresses the future much more than the past, and the change is to be absolute, root and branch. But he sees available revolutionary movements as simply fights about property; he wants a different vision, a new sense of life, before he commits himself; otherwise it will be not regeneration but a final collapse.³⁹

基本的にロレンスが望んだことは, ‘regeneration’であって, ‘revolutionary movements’を単なる「財産」所有をめぐる闘争とみなしたと、ウイリアム

ズはロレンスが‘revolution’に対して否定的であった点を指摘しているが、こういったロレンスの特異な捉え方を説明するため、彼はG. ギボンの *A Scots Quair* という3部作で見られる田園地帯からの農民たちの都市への移行の様子を紹介している。この小説は、30年代の労働運動の実相を生き生きと写し出しており、スコットランドの田園地帯の小農階級 (peasantry) がイギリスの産業資本の流入によって崩壊し都市へと流出していき、最後には失業者の群れとなって街頭での飢餓行進 (hunger marches) を行なう場面で終わっている。ギボンは、民主主義、教育、労働運動といったものを、田園地帯からの脱出のための重要な道具とみなし、田園での体験を「牧歌的」であるとか「伝統的」であるとか言って美化することは「反動的」であると考えたと、ウイリアムズは捉えている。いわば、*The Rainbow*で女たちが望んだ「教育」への道こそ、田園の窮状から、つまり‘border’から人々を脱出させる方向であるとギボンはみなししたのである。

ウイリアムズは、このギボンの‘border’の乗り越え方と対比して、ロレンスの乗り越え方の特異さを強調している。彼は、ギボンと同じく、田園地帯での人々の暮らしを懐古的に捉えそこにある種の理想の世界を見いだそうとはしていないし、産業主義や物質主義を敵とみなしている。しかし大きく異なるのは、ギボンが味方と考えた民主主義、教育、労働運動までも敵とみなし、人間の理想とか観念に毒されていない生のままの自然に向かうことこそ人間本来のあるべき姿であるとロレンスが主張したところだと、ウイリアムズは指摘している。そしてこのロレンスの主張は自家撞着をしばしば引き起こし、あの‘leadership novels’を執筆した頃のロレンスの論は‘sourest’であったと批判はしているが、晩年にいたってその論は修正されたと、ウイリアムズは判断している。そのような判断の根拠として、ロレンスの抱えた問題が複雑で厄介極まりないものであったことを、ここでも再度、挙げている。ロレンスが「意識の冒険」によって思い描いた過激な論は、多くの矛盾や抑圧のもとで生み出された、正に‘the knot of a life’であり、単純に白か黒かと決

められる類いの問題ではなかったと、ロレンスを擁護している。ところがどういうわけか、ロレンスが苦闘したこの問題が、いつの間にか何ら問題のな

§な安易な捉え方はロレンスに対する侮辱行為ではないかと、ウイリアムズは憤慨している。つまり、ウイリアムズが一貫して指摘してきた‘border’にまつわる問題は何一つ解決していないのに、その問題で苦闘したロレンスを便宜的に白か黒か、右か左かに片付けてしまおうとする（もちろん左派系も含めて）批評家や研究者たちを厳しく非難しているのである。⁴⁰

* * *

1973年の*The Country and the City*以降、ウイリアムズはロレンスを特に取り上げて集中的に論じていない。ときどき論集などに寄稿した論文にロレンスへの言及が散見されるくらいである。最後に、‘class’について論じた小論を取り上げて、ウイリアムズがロレンスの描いた‘class’をどのように捉えていたかについて簡単に紹介しておきたい。1982年に書かれた“Region and Class in the Novel”という小論において、ウイリアムズは、ディケンズやギャスケルなど19世紀のイギリスの小説家たちは確かに‘class’を描きはしたが、その場合、社会全体の階級という観点からではなく、一種特別な‘region’を取り扱っているという視点から描いていたと述べている。

A class can indeed be seen as a region: a social area inhabited by people of a certain kind, living in certain ways.⁴¹

ところがマルクス主義的な‘class’の捉え方は、19世紀の小説家たちは全く異なっていたと述べ、その捉え方の特徴を次のように説明する。

But a Marxist sense of class, while indeed and inevitably recognizing social regions of this kind, carries the inescapable and finally constitutive sense of class as a formation of social relationships within a whole social order, and thus of alternative and typically conflicting (in any case inevitably *relating*) formations.⁴²

この‘class’と‘region’のかかわりの視座からロレンスを見ると、確かに‘working-class writers’と言われる作家たちの中でも彼ほどに典型的な人物はない。というのは、彼は労働者階級の家族の出身というだけでなく、ノッティンガムの炭坑地帯という特殊な‘region’に生まれ落ち、その地域のことを描いたのである。しかし、かと言って、ロレンスを労働者階級の代表的な作家だとみなすのは危険であると、ウェリアムズは警告している。なぜならばロレンスが最初に描き出したのはマルクス主義的な意味での‘class’ではなかったからである。しかしながら、彼は、19世紀の小説家のように、労働者階級の世界をブルジョワの中心世界の周辺部に存在する一種の‘region’と捉え、外部の観察者として、労働者たちの地域社会を描いたわけではなく、彼自身が正に生きたその社会こそすべての中心であると捉え、そこでの家族、友人などを実体のあるものとして描き出したからである。

ウェリアムズは、先の *The Country and the City* でも述べていたように、ここでも、労働者階級に生まれ育ったからといって、ロレンスはブルジョワ階級によって不当に支配されている労働者たちを解放するために、‘class’の問題を前面に持ち出しプロレタリアートの連帯を呼びかける類いの作家でないことを、改めて強調している。ウェリアムズは、初期のロレンスは労働者の生活を何のイデオロギーにも囚われず生きた形で描き出したという点で‘working-class writer’として重要な作家であると主張しているだけでなく、さらに労働者たちの世界を中心に実体のある小説世界を構築したため、労働者階級の世界を一種の‘region’とみなしてきた19世紀からの見方を一変させた

作家であるとも、主張しているのである。いずれにしろ、ウイリアムズは、*Culture and Society*以来30年近く経てもロレンスに関しては、ほとんどその主張しているところは変わらない。最晩年とも言える1982年に書かれたこの小論においても、ロレンスをあるがままに受けとめることこそ重要であり、労働者階級出身だからと言って当然ある種のイデオロギーに添って書くはずだという先入観を真っ向から否定している点など、晩年かなり左傾化したと言われていたウイリアムズは、ロレンスに関しては、一種の一貫性を持って若き日の主張を貫いてきたと筆者には思われてならない。

注

- 1 C. コードウェルのロレンス批評については、拙稿[「D. H. ロレンスとマルクス主義批評——C. コードウェルの場合——」, 『同志社大学英語英文学研究』68号(同志社大学人文学会, 1997年3月), pp. 193-218]を参照されたい。
- 2 ファシストとしてのロレンスに対する批判については、拙稿[「ファシズム・リーダーシップ・『羽鱗の蛇』」, D. H. ロレンス研究会編『ロレンス研究—「羽鱗の蛇」—』(朝日出版社, 1994年11月), pp. 5-71]を参照されたい。
- 3 J. Childers & G. Hentzi (eds.), *The Columbia Dictionary of Modern Literary and Cultural Criticism* (New York: Columbia Univ. Press, 1995), p. 175.
- 4 *Ibid.*, p. 176.
- 5 Terry Eagleton, "Introduction," *Raymond Williams: Critical Perspectives*, ed. T. Eagleton (Cambridge: Polity Press, 1989), p. 1.
- 6 *Ibid.*, p. 5.
- 7 Tony Pinkney, "Raymond Williams and the 'Two Faces of Modernism,'" *Raymond Williams: Critical Perspectives*, pp. 18-19.
- 8 ウィリアムズは、*Modern Tragedy* (California: Stanford Univ. Press, 1966)において、"Social and Personal Tragedy: Tolstoy and Lawrence"という章をもうけ、トルストイとロレンスの関連について論じている。トルストイの『アンナ・カレーニナ』とロレンスの『チャタレー卿夫人の恋人』とは、女が夫を捨て別の男に走り、男どもが作り出した社会に対して反逆を試みる点、共通するところが多いと指摘している。また『アンナ・カレーニナ』での悲劇的状況よりも、『恋する女たち』での状況のほうが一層明確であると述べ、特に『恋する女たち』では、「社会」と「個人」との分裂が徹底して追求され、「社会」も「個人」もいずれも信じることができなく

なった“a loss of belief”の悲劇が描かれており、それはわれわれの世紀の最も特徴的なものであると、説明している。

- 9 Cf. Raymond Williams, *Problems in Materialism and Culture: Selected Essays* (London: Verso, 1980), pp. 100-101. ウィリアムズは、“Social Darwinism”の章で、ロレンスが「進化論」に基づいて論を展開し、‘positive transforming idea’を提示していることを紹介し、「科学」も「進化」も全く信じないと常々言っていたロレンスが進化論に基づく論を展開しているのは驚くべきことだと、述べている。
- 10 Stuart Hall, “Politics and Letters,” *Raymond Williams: Critical Perspectives*, p. 58.
- 11 *Ibid.*, pp. 59-60.
- 12 T. イーグルトン, 大橋洋一訳 『文学とは何か—現代批評理論への招待』(岩波書店, 1995年), p. 52.
- 13 Raymond Williams, *Culture and Society 1780-1950* (London: Chatto & Windus, 1959), p. 200.
- 14 F. R. Leavis, *D. H. Lawrence: Novelist* (London: Chatto & Windus, 1955), p. 17.
- 15 *Culture and Society 1780-1950*, p. 202.
- 16 *Ibid.*, p.202.
- 17 例えば、『息子と恋人』において、13歳のポールが職を探そうと Co-op の‘reading-room’に出かけて、その部屋の窓から外を眺めながら自分はすでに「産業主義の囚人」になってしまったと思うところがある。その場面には、作者ロレンスが体験的に感じていた産業主義に対する批判が明らかに映し出されていると考えられる。Cf. *Sons and Lovers* (Harmondsworth: Penguin Books, 1979), pp. 113-114.
- 18 Cf. D. H. Lawrence, “Autobiographical Sketch,” *Phoenix II*, ed. W. Roberts & H. T. Moore (London: Heinemann, 1968), pp. 595-596.
- 19 *Culture and Society 1780-1950*, p. 205.
- 20 S. Hall, *Raymond Williams: Critical Perspectives*, p.56.
- 21 *Culture and Society 1780-1950*, pp. 209-210.
- 22 *Ibid.*, p. 211.
- 23 *Ibid.*, p. 213.
- 24 *Ibid.*, p. 334.
- 25 Raymond Williams, *The English Novel from Dickens to Lawrence* (London: Chatto & Windus, 1970), p. 14.
- 26 T. イーグルトン, 『文学とは何か—現代批評理論への招待』, pp. 51-59.
- 27 *The English Novel from Dickens to Lawrence*, p. 169.
- 28 *D. H. Lawrence: Novelist*, pp. 18-19.
- 29 *The English Novel from Dickens to Lawrence*, p. 172.

30 *Ibid.*, p. 173.

31 *Ibid.*, p. 175.

32 *Ibid.*, p. 178.

33 *Ibid.*, p. 176.

34 *Ibid.*, p. 182.

35 *Ibid.*, p. 184.

36 E. サイードは, “Jane Austen and Empire,” *Raymond Williams: Critical Perspectives*, p. 152で, 現代イギリス社会においても, ブルジョワのイデオロギーや文化支配によつて ‘border’ と ‘metropolis’ との間に植民地主義的なシステムができあがつており, ウィリアムズはその点をよく分かっていたと述べている。

37 Raymond Williams, *The Country and the City* (New York: Oxford Univ. Press, 1975), p. 265.

38 *Ibid.*, p. 266.

39 *Ibid.*, p. 268.

40 *Ibid.*, p. 271.

41 Raymond Williams, “Region and Class in the Novel,” *The Uses of Fiction: Essays on the Modern Novel in Honour of Arnold Kettle*, ed. D. Jefferson & G. Martin (Milton Keynes: The Open Univ. Press, 1982), p. 64.

42 *Ibid.*, p. 64.

Synopsis

Raymond Williams's Criticism of D. H. Lawrence

Hirokazu Yoshimura

Before the Second World War, Marxist criticism of D. H. Lawrence was highly focused on whether or not he was a pro-Fascist. Christopher Caudwell, whom I mentioned in the previous paper, criticized Lawrence as a Fascistic writer, though Caudwell appreciated him as numbering among the ‘sincere artists’ because he was very conscious of his messages and interested in changing society by revolutionary movements. Caudwell was a typical Marxist critic, who died for the Marxist cause in the Spanish Civil War in 1937. Now, from this point at the end of the twentieth century, his criticism of Lawrence seems to be so deeply influenced by orthodox Communist ideology and to be anachronistic and not worth consideration, but, when we observe the trends of Marxist criticism in the critical history of Lawrence, Caudwell’s criticism is considered to occupy the place of the proto-type for grasping the critical processes of Lawrence after the Second World War. The orthodox Marxist criticism, after the War, has been reexamined and modified by newly generated Marxist critics.

Raymond Williams is one such critic. He was a well-known don of Cambridge and called the ‘English’ or British Lukács. I take up his criticism of Lawrence in this paper, for his treatment of Lawrence is not so doctorinare as Caudwell’s, and also so unique and illuminate as to represent a different figure of Lawrence as a creator of a ‘knowable community.’ Williams did not

write a fully coherent book dealing with Lawrence from beginning to end, but he devoted chapters to Lawrence in *Culture and Society*, *The English Novel from Dickens to Lawrence*, and *The Country and the City*, which I take up and investigate in this paper. Of course, he wrote sporadically about Lawrence in *Modern Tragedy* (1966) and such other collections of essays as, for instance, *Problems in Materialism and Culture: Selected Essays* (1980) or *The Uses of Fiction* (1982), which I pay only passing attention to.

In *Culture and Society* (1959), Williams starts out by discussing Lawrence's ideas of society, and points out the close relation between Carlyle and Lawrence. He maintains that, though Lawrence took over 'the major criticism of industrialism from the nineteenth-century tradition,' he, unlike Carlyle, did not learn the evilness of industrialism 'as a matter of retrospect from the adult life'; he was born and grew up in a miner's family, and was exposed himself to the industrialism to be caught in its trap. If he could not have the opportunities to educate himself, he would become 'a prisoner of industrialism.'

Williams, on one hand, highly estimates the early chapters of *Sons and Lovers* as 'a marvellous recreation' of a living family and 'an indictment of the pressures of industrialism.' On the other hand, however, Williams indicates that Lawrence's attention after *Sons and Lovers* was directed to the problems of individuality. At the stage of *The Rainbow*, Lawrence started to take up the problem of how an individual could live fully in the industrialized society, and in *Women in Love* he continued to explore undauntedly the subject of individuality. This exploration, however, appeared to some people that Lawrence evaded confronting the social problems, because the industrial system was so strong and overwhelming—they spoke ill of him: he rejected 'the claims of society,' and escaped into a matter of personal concern. Thus, Lawrence was blamed for his attitude towards society. But Williams defends

him stoutly by saying emphatically, ‘he was rejecting, not the claims of society, but the claims of industrial society,’ because Lawrence himself, who believed that ‘the instinct of community’ was deeper and stronger than ‘the sexual instinct,’ made a strenuous effort to explore ‘the living, organic, believing community’ in his works which were the outcomes of his ‘venture into consciousness.’

As for the much disputed Fascistic idea of reforming society Lawrence set forth during his exile period, Williams, unlike Caudwell, does not severely blame Lawrence, though Williams gently points out Lawrence’s mistakes: Lawrence, like the later Carlyle, made the questionable claim that ordinary people should recognize ‘superior beings’ and need to bow down and submit to them.

While in *Culture and Society* Williams treats of Lawrence’s ideas of individuals and society expressed in his essays, in *The English Novel from Dickens to Lawrence* (1970) Williams mostly takes up Lawrence’s novels and seems to disclose his distinctive feature as the twentieth century novelist struggling courageously against industrialized society. At first, in the same manner as in *Culture and Society*, Williams highly evaluates Lawrence’s early works—especially the stories up to *Odour of Chrysanthemums*, the first three plays, and then *Sons and Lovers*. Williams calls *Sons and Lovers* ‘an achievement,’ ‘not a preliminary.’ He offers an interpretation that Lawrence’s development as a novelist reached the peak at the stage of *Sons and Lovers*. Of course, Williams appreciates *The Rainbow* and *Women in Love*, saying that, among others, *Women in Love* is ‘a masterpiece of loss.’ But he places less value on them. Such an evaluation is considered to be formed by his long-cherished ideas of a ‘knowable community.’ Lawrence could build up a ‘knowable community,’ Williams maintains, in *Sons and Lovers*, but, in *The*

Rainbow, he tried to describe Ursula's insistent exploration of individuality or 'singleness' to the maximum, and in *Women in Love* he kept up his exploration: main characters seek their own consummation as individuals, and arrive at their own culmination. In a sense, Lawrence succeeded in creating a novel-world of 'a unique kind,' where 'pure single being,' and 'the pure duality of polarisation, each one free from any contamination of the other,' were represented clearly and exhaustively. His effort, however, to explore 'singleness' gave rise to the destruction of the world of 'togetherness.' In *Women in Love* Lawrence could marvellously explore to its limit the problems of individuality in modern industrialized society, but he lost the most precious 'knowable community.' For Williams, to try to establish a 'knowable community' in this isolated, detached world is much more important than to try to pursue any possibility of individuality; therefore he highly estimates *Sons and Lovers*.

In *The Country and the City* (1973), Williams, tracing the history of English literature, discusses the problems of the 'border' and clarifies the complicated situations which lie between metropolitan areas and rural areas, or the bourgeoisie and the proletariat, or the culturally rich and the poor, or the educated and the uneducated, and so on. He seems to have the same critical mind on the colonialistic system found in modern English society as shown in E. Said's *Orientalism*, for Said, in an article, highly estimates Williams's effort for tackling the problems of the 'border' in order to clear up the colonialistic condition tyrannized by bourgeois ideology and culture.

As for Lawrence, Williams compares Lawrence's indecisive attitude towards social reformation with a Scottish working-class writer, Grassic Gibbon's straightforward attitude. Gibbon describes the peasantry in marginal land who were forced to be routed out of their land by 'capitalistic agriculture'

and went to the cities to become wage-workers. In the end, they had no other way to fight against the bourgeois capitalists. This led to the way to the revolution. It can be said from a Marxist point of view, that Gibbon succeeds in embodying Marxist ideology by means of his realistic, persuasive descriptions of the peasantry's inexorable movement from the country to the city. On the other hand, Williams remarks, Lawrence took the 'social and historical forces' in relation with 'life and death,' and he regarded industrialism, property and possession as 'the signs of death.' Then, Lawrence insisted that we, human beings, should live 'in contact with natural processes—animals and birds and flowers . . .': that is, he advocated the regeneration of human beings themselves.

Williams's criticism of Lawrence, compared with Caudwell's, seems to be much gentler and, at some places, sympathetic towards Lawrence. If the critics reflect the trends of their own times, we can say both Caudwell and Williams fulfilled their roles as critics. Really, after the Second World War, Marxist critics made much account of the fact that Lawrence was a miner's son. In a time he was counted for a representative of working-class writers. Such a trend of the time after the War possibly exerted the decisive influence on Williams's interpretation of Lawrence. But it seems more plausible to me that Williams's favorable interpretation of Lawrence was caused by the former's warm sympathy towards Lawrence. As is well known, Williams came from 'a rural working-class community in Wales' to Cambridge: in other words, he came from 'the cultural border' to the cultural metropolis. Though he became a don of Cambridge, he spoke 'more like a countryman than a don,' and could not exactly conform to the bourgeois-middle class establishment. And then, we can imagine that Williams saw his own struggling *doppelgänger* in Lawrence: therefore he was so sympathetic towards Lawrence. Finally, in

conclusion, we must add that Williams stubbornly advocated his ideas of a ‘knowable community’ under the guise of criticizing Lawrence’s works.